

## 引退後の力士たちが担う相撲文化に関する人類学的研究

上之郷 奈穂\*

李 仁子\*\*

本稿では番付が十両以上で一人前とされる相撲社会において、そこまで行くことができずに引退を迎えた力士の入門から引退後の歩みを記述する。出世できずに引退を迎えた力士たちの就職先は様々であるが、元力士の中に同じ部屋出身の者同士ではOB会を組織し、相撲にゆかりのある神社に碑を建立し毎年神事を行っているものもある。そこには、神事ともされる相撲の担い手であったかつての力士の面影を見て取ることができ、引退によって完全に力士であることを終わらせるのではないということがうかがえる。そしてこの組織で築かれる関係性は、現役時代の番付による序列・入門時期による序列以上に、「同じ部屋に所属して同じ釜の飯を食べた」という経験に基づいている。そこから、これまでの研究では扱われてこなかった引退後の力士たちの担う相撲文化の様相が浮かび上がってくる。

**キーワード：相撲文化、力士の引退、相撲部屋の一門**

### はじめに

相撲は日本でとても馴染みのある競技である。その競技が行われる場面は様々で、平安時代に盛んだった相撲節会から武家相撲、勸進相撲、そして興行としての相撲に至る。また今日ではスポーツとしても相撲が親しまれており、性別を問わず女性の競技者<sup>1</sup>もいる。さらに祭礼として相撲が行われる風習が残っている地域<sup>2</sup>も数多くある。このように多様にみられる相撲であるが、今日我々が最も接する相撲を1つ挙げるとするなら、それは大相撲ではないだろうか。本場所はテレビ中継<sup>3</sup>があり、取組の結果は新聞やニュース番組で報道される。その大相撲の主役たる力士であるが、体が大きく、和装に身を包み、鬘を結っており、その風貌は世間離れている。しかしこの感覚こそ相撲が神事で、力士はその神事の担い手であり日常とは一線を画した特別な存在であるということを経験的に認識する助けともなっているのではないだろうか。その一方で、人々は土俵で繰り広げられる力士たちの白熱した取り組みに心躍らせる。土俵では勝敗が決まる取組(=競技)と、土俵に上がる者の風貌・所作(=神事)が同時に成立しているのである。

これまでの大相撲に関する研究は神事と競技の二元論で語られることが多かった。しかし、相撲

---

\*教育学研究科 博士課程後期

\*\*教育学研究科 准教授

の成り立ちや取組の様子見ていけば相撲が神事でありかつ競技の要素を持ち合わせているのは明らかで、これらは相撲社会で混在しておりはっきりと2つに分けられるものではない。本稿では、これら2つの要素が織りなす相撲社会において、元力士の視点から捉えられる相撲の様相を描写することを試みる。

## 1. 問題の所在

相撲に関する著名な研究として生沼芳弘のものが挙げられる。生沼は1974年に相撲研究に着手し、昭和50年(1975年)5月から昭和52年(1977年)3月までの約2年間高砂部屋に寄宿しながら調査研究を行った。その結果をまとめた『相撲社会の研究』(1994, 不昧堂出版)では、高砂部屋の事例を挙げながら、相撲社会全体の様相を明らかにした。力士数や部屋数の推移、一門と呼ばれる相撲部屋の系譜を明らかにし、また1757年から1970年までの約210年間における関取と年寄の出生年、初土俵年、入幕年、現役引退年、廃業年、没年といったデータと各年次の師弟関係、年寄名跡の継承を照らし合わせて、相撲社会の年寄名跡がどう変動してきたかを明らかにした。江戸時代には弟子によって継承されることが多く血縁関係で相続されることもあった年寄名跡だが、明治維新後になると現役引退後の経済基盤確保のため年寄となる力士が増え、年寄名跡は必ずしも師弟関係で継承されなくなった。その後は先代の養子となってその年寄名跡を相続する例が増え、血縁関係による相続はなくなった。

以上が生沼の研究の概要である。しかし、ここでの研究の対象となったのは主に関取や年寄であり、出世しなかった幕下以下の力士に関しては数値上のデータとして触れられているにすぎない。確かに相撲社会を運営・維持していくのは年寄であり、また相撲社会では関取になってようやく一人前の力士としての扱いを受ける。しかし、相撲人口全体を見たときに圧倒的に多いのは出世できずに引退していく力士である。また、本場所のテレビ中継は午後3時頃から行われているが、取組そのものは午前8時半頃から行われている。つまりテレビでは中継されていない力士が大勢いるのである。本稿ではこれらのテレビで中継されない、表立って話題にならない彼らに注目したい。なぜなら、表に出て誰もが注目するような人物や出来事のみ目を向けるのではなく、そうではない物事や人々の在り方を詳細に記述することが文化人類学、ひいては人文学の目指すところだからである。彼らは引退を迎えても公に報道されることはなく、ひっそりと角界から身を引き日常へと戻っていく。こうした引退を迎えた彼らの行方を追った研究はほとんど見られない。中には相撲部屋で習得したちゃんこ料理の腕をいかして自分で店を開く例もあるが、それはほんの一握りである。しかし、このように引退を迎えた元力士たちの中にはOB会を組織して毎年神事を行っている者たちがいる。それは出羽海一門の名家である出羽海部屋出身の元力士たちで組織されている会である。本稿では、この会に所属し現在会長を務めている元力士から聞き取りした内容、彼らの活動場でフィールドワークをして得られた内容をもとに、彼らの立場から捉えられた相撲がどのようなものであるのかというのを、現役時代および入門に至るまでの経緯、引退後にまで目を向けて記述する。

本稿の構成は、第2章で現在5つある相撲部屋の一門の系統図を引き合いに、出羽海部屋が相撲社

会でどのような立ち位置であるのかを述べる。続く第3章では出羽海部屋出身のある力士の入門まで、現役中、引退後の歩みを追い、第4章では第3章で述べた力士のこれまでの歩みが引退後の活動にどう続いているのかを考察する。

## 2. 相撲部屋と一門の系譜

大相撲の力士たちはそれぞれ相撲部屋に所属し、そこで暮らしながら日々稽古に励む。2020年9月時点で相撲部屋は44ある<sup>4</sup>が、部屋数は時代ごとに変動がみられる。また、相撲部屋には一門と呼ばれる派閥があり、現在の一門は出羽海一門、高砂一門、二所ノ関一門、伊勢ヶ濱一門、時津風一門の5つがある。生沼(1994:129)は、一門が形成された背景には経済的要因があることを指摘している。明治維新によりそれまで大名に依存していた抱え力士が相撲部屋に所属するようになり、相撲社会全体として従来のだまへの依存的体質を改める必要に迫られた。年2回の本場所の興行収益だけでは経済的な自立は困難であったため相撲部屋は地方巡業を行うようになったが、この時に集まった相撲部屋が一門である。一門の部屋は基本的には本家と分家という関係で結ばれるが、別の一門から系譜に加わることもあれば、一門の部屋が他の一門に所属するという場合もある。このように複雑なケースもあるが、本節ではベースボール・マガジン社の大相撲名門列伝シリーズを参考に、戦後一門に所属した部屋で系統図を作成した(図1～5)。

本節では5つある一門の系譜を元に、①本稿で扱う事例の元力士が所属していた出羽海部屋が相撲社会全体でどのような位置づけであるか、②一門は相撲社会においてどのような機能を果たしているかを述べることにする。

### ●出羽海一門

出羽海一門の本家である出羽海部屋は寛政年間(1789～1801)の前頭筆頭であった出羽ノ海右衛門が始まりとされる。江戸年寄名ではなく庄内地方の地方頭取として部屋を興すも、2代目の鹿間津滝右衛門の代で閉鎖される。その後1861年に幕下2段目の桂川立吉が3代目出羽ノ海を襲名し、翌年の1862年に引退し部屋を創設した。これ以降部屋は途切れることなく現代まで続いており、出羽海部屋ではこの3代目を部屋の創始者として位置付けている(『大相撲名門列伝シリーズ1 出羽海部屋|春日野部屋』:pp.35-36)。

出羽海一門には分家独立は許さずという不文律がある。しかし、唯一の例外として九重独立騒動が挙げられる。昭和42年、当時の出羽海部屋7代目師匠(元幕内出羽ノ花)は九重(元横綱千代の山)を後継者とする周囲は見ていたが、7代目出羽海は横綱佐田の山を婿養子にして後継者とすることを明らかにした。そして九重は大関北の富士ら10人を連れて独立し、出羽海一門から破門されて高砂一門に移籍した(『大相撲名門列伝シリーズ3 高砂部屋』:p.39)。

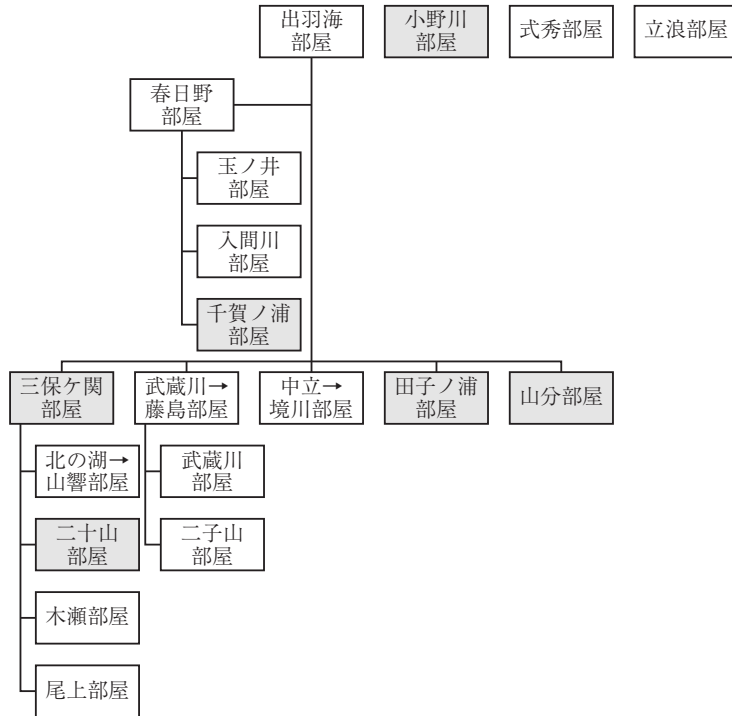


図1 出羽海一門系統図

(※以下色がついている部屋は現在なくなっているか他の一門に移籍した部屋。)

●高砂一門

高砂一門の本家である高砂部屋は明治11年、高砂浦五郎により創設され、高砂一門は現存する一門で最も古いとされている。前述の九重独立騒動により出羽海一門を破門された九重は高砂一門に移り高砂一門の中に新たな系統を開いた。また、現存する一門の中では部屋数が最も少ない(『大相撲名門列伝シリーズ3 高砂部屋』: pp.35-39)。

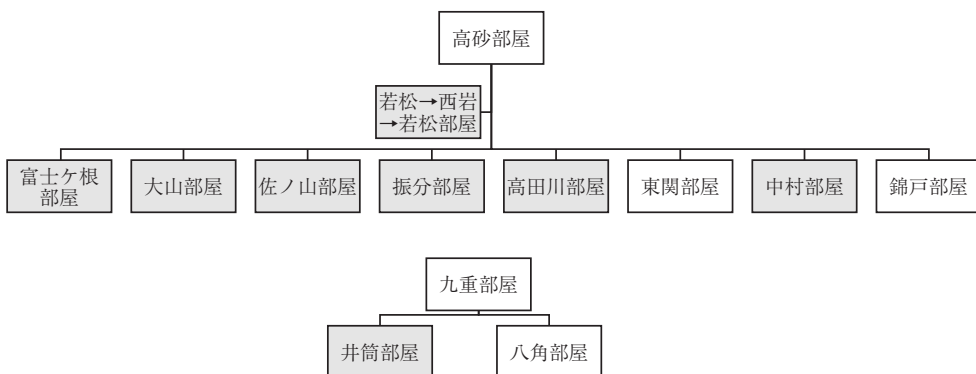


図2 高砂一門系統図



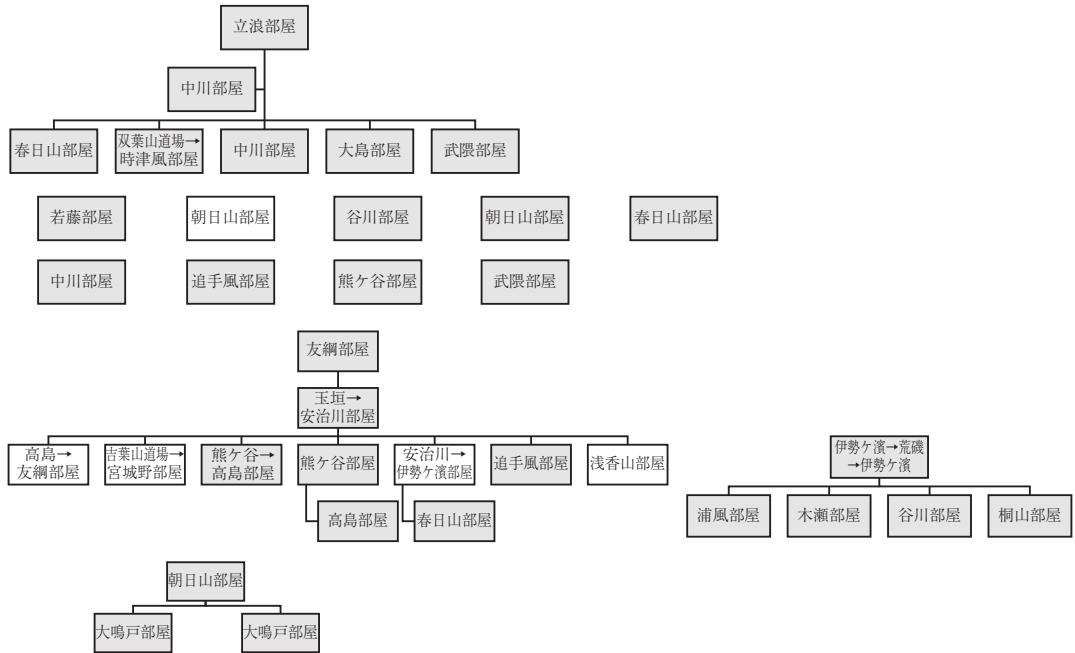


図4 伊勢ヶ浜一門系統図

●時津風一門

時津風部屋の創設は元横綱双葉山定次である。昭和16年(1941年)11月、双葉山が横綱一代年寄制度<sup>5</sup>を利用して独立し、双葉山相撲道場を設立した。これが時津風部屋の始まりとされている。相撲部屋の一門の中でも比較的新しい一門である。双葉山はもともと立浪部屋所属の力士であり、立浪部屋から弟子を数名引き連れ、また当時親交のあった糸川親方の好意により糸川部屋の弟子と建物を譲り受ける形で双葉山道場ができた。そこでは以下のような力士規七則を掲げた。

- 一、我等幸に万物の霊長たる人間と生れ、万邦無比の皇国に臣民たり。敬んで臣子の本分を全うすべし。
- 一、相撲は国技なり。国史と共に生成し、国運と共に消長す。力士たる者当に日本精神を体現し、風俗の淳美を粹養すべし。
- 一、力士の大成は最も師匠の切磋琢磨に待つ。深く師恩有益を念うて、報謝の志を忘るべからず。
- 一、斯の道は須臾も懈怠あるべからず。由来光陰は過ぎ易く、人生は老い易し。須く時に及んで勉勵すべし。
- 一、人にして礼節なきは禽獸に侔し。力士は古来礼節を以て聞ゆ。謹んで斯道の美德を失うこと勿れ。
- 一、力士は質実剛健を旨とし、軽佻浮華を忌む。宜しく卓然として時流に拘らず、堂々たる風格を發揮すべし。

一、居常健康に留意し、酒色を慎み、澹泊身を持し、荒怠相戒め、以て長く大成せんことを期すべし。  
 (『大相撲名門列伝シリーズ5 時津風部屋』: p.4,pp.35-39)

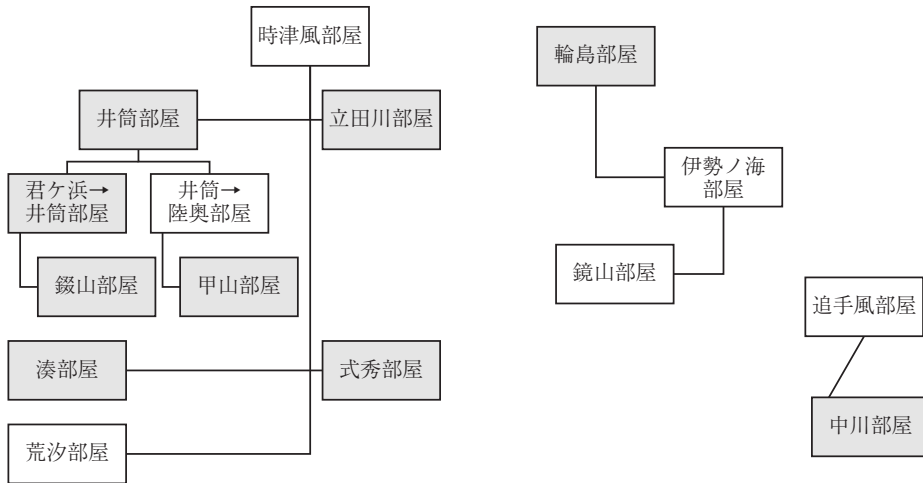


図5 時津風一門系統図

以上が現在の一門の系譜である。一門ではかつて本家の部屋にだけ土俵を作り、一門の力士たちは本家の相撲部屋に集まって稽古をし、風呂や食事も本家の部屋で一緒にしていたのが一般的であった。また、一門は行司・呼出し・床山・若者頭・世話人の賃借関係で結びついている。(生沼: 1994:130,132)。さらに、地方本場所では同一門の部屋同士で宿舍を同じくしているケースもあった。

しかし1965年1月場所から部屋別総当たり制が採用されたことにより、同一門に所属する力士同士であっても部屋が異なっていれば取組が組まれるようになった。この頃から徐々に一門の意識は薄れていくようになる。

### 3. 大相撲力士と相撲一〇さんを事例に一

出羽海部屋に在籍した歴代の力士で長崎県出身の割合は高い。東京都出身の63名に続き、長崎県出身者は58名となっている。次いで北海道33名、大阪府30名となっているので、東京都と長崎県出身者が突出して多いことがわかる(図6参照)。時代ごとに変動はあれ、東京都と長崎県の人口を考慮すると力士になる割合が高いのは長崎県の方であると言える。このことから、長崎は相撲が盛んな土地柄なのではないかということがうかがえる。そこで、長崎県出身の元力士〇さんを事例に相撲部屋入門までと現役時代、引退後という段階に分けてそれぞれの時代における相撲との関わりを述べる。



図6 出羽海部屋歴代力士の人数別出身地

※相撲レファレンス (<http://sumodb.sumogames.de/Default.aspx?l=j>) をもとに筆者作成

### 1) 相撲との出会い

昭和26年(1951年)生まれのOさんは、長崎県野母崎町(現在の長崎市)の出身である。野母崎町は長崎半島の南端に位置している。Oさんは漁師の家に生まれた。漁業が盛んな町で、船持ち漁師と雇われ漁師がありOさんは雇われ漁師の家であった。中学では相撲だけでなく野球やカヌーなど様々なスポーツにも通じていたが、「本当は野球をやりたいけど野球をするのにはお金がかかるから」ということで相撲部に入部した。中学3年生の時には相撲の県大会で3位という成績を取めた。すると、長崎県の相撲連盟理事長と長崎県にある農業高校の校長が訪問し高校で相撲をやらないうかという誘いがあった。当時のOさんは家庭状況から高校に進学することは難しかった。そのうえ高校はOさんの自宅からは遠かったため自宅からの通学は難しく、寮に入るか下宿しながら通う必要があったが、当時のOさんの家庭にはそこまでする金銭的余裕はなかった。しかしスカウトに来た2人の意図は3年後に行われる長崎国体に向けて選手の育成を図るというものであったため、特別に奨学金制度を設立することになり、結果Oさんは高校へ進学することとなった。

長崎県で行われる国体に向けて選手の育成に力を入れていた当時の高校では、他にも有力選手のスカウトを行っていた。入学後1年目は寮から通い、2年日以降は下宿先から通い、相撲部の練習に明け暮れた。また部活での稽古のほかに、週末になると九州の各地区で行われる神社での相撲大会に参加して稽古を積んだ。高校の部活で鍛えられているため、地区の参加者では歯が立たないということがざらであった。そこではお花と呼ばれる祝儀を受け取り、それをもって小遣い稼ぎとしていた。また、高校の部活では毎週土曜日にちゃんこ会と呼ばれる食事会が開かれた。そこでは校長先生や顧問以外の先生も参加しており、試験の点数が芳しくない部の学生に対し便宜を図るよう顧問が働きかけることもしばしばだった。相撲部ということで体重を増やさなければならないため、部の先輩からはたくさん食べるように言われ、1年ごとに体重が10キロ増えていった。部員のみではなく校長や他の教員といったメンバーをも含む広く開かれた環境での食事、また体を大きくするため多少の無理をしながらの食事というのは相撲部屋での食事にも通じるところがうかがえる。



高校3年生で迎えた長崎国体では準決勝まで進み、3位という成績を収めた。高校卒業後は教員を目指すため大学に進学することになると思っていたOさんであったが、元出羽海部屋の力士でOさんと交流のあった人物の紹介で当時の出羽海(元横綱佐田の山)がOさんをスカウトに来た。出羽海部屋の師匠が来たということで地元は大騒ぎになったが、Oさんはそこで出羽海部屋に入門することが決まった。

## 2) 現役時代

Oさんが入門したのは1970年で、その年の1月に初土俵を踏む。同期には後の横綱となる輪島がいる。現役時代の最高位は幕下25であった。Oさんが入門した当時部屋の力士はかなり多く、Oさんからの聞き取りでは50人くらいはいたとのことだった。部屋での生活にあたり、ここでは力士の中での序列や親交について述べる。

よく相撲社会は実力主義の世界と言われ、学歴や家柄などに関係なく番付によってのみ序列が決まるというのが広く認知されている。確かにその通りではあるが、実際には番付による実力での序列だけではなく入門時期による年功序列も存在しており、1日でも早く入門した者がたとえ番付が下であっても先輩となる。年齢による序列がみられる一例として食事の順番が挙げられる。幕下以下の力士になると先輩から順に食事をとる。ここでいう「先輩」とは、入門時期が早い力士のことである。しかし番付による序列が優先されるシーン、入門時期による序列が優先されるシーンはそれぞれはっきりと決まっているわけではなく、これらの序列は部屋での生活において混在していたと言える。

また相撲社会には付け人制度があり、幕下以下の力士がこの付け人の役割を担う。十両以上の力士や師匠について世話をする役割で、Oさんも付け人の経験をしている。付け人の中でも序列があり、基本的には番付によって決まる。上から部屋頭、中堅、洗濯機という言い方をする。しかしOさんの話では番付ではなく入門時期によって付け人の役割が決まることもあったという。また部屋頭がしっかりと付け人としての務めを果たしていない場合に下の者が部屋頭に対して意見するということもあった。

部屋での生活は上下をはっきりとさせていながらもその根拠となる基準は時と場合によって番付であったり入門時期であったりする。しかし部屋には序列によって築かれる関係性だけではなく、同郷の力士たちで築かれる関係性もある。出身地や出身校が同じ力士同士は「同じ国もん」という言い方をし、部屋に数多くいる力士の中で親近感を持つようになる。

## 3) 引退

Oさんが在籍していた1970年代頃は入門から数年で結果が出せなければ引退するという暗黙の了解があった。ちょうど「同じ国もん」である地元の先輩が1年前に引退したこともあってOさんも引退を考えるようになり、地元開催となる1976年の九州場所を最後に引退することを決めた。引退後働くことを考えると自動車免許を取っておいた方がいいと思ったOさんは、部屋に在籍しながら

教習所に通いたい旨を師匠に伝え、九州場所が終わるとすぐに両国の部屋へ戻って部屋から教習所に通いながら免許を取得した。このように引退を決めた力士はすぐに部屋を出るのではなく、身の振りが決まるまで部屋に滞在するという事も多かった。

引退を迎える力士は引退相撲を行う。和歌森(2003:176)は引退相撲では断髪式のほか、相撲甚句や初っ切り、その力士の系統の幕下以下の取組が行われ、人気力士の引退相撲では入場券の入手すら困難であると述べている。断髪式では後援者やその他関係者が次々にはさみを入れていき、最後に部屋の師匠がはさみを入れて鬘を完全に切り落とす。しかしここで述べてきた引退相撲や断髪式は出世した力士しかすることができない。現在では出世しなかった力士でも部屋の中で小規模な断髪式を行うこともあるが、Oさんが引退を迎えた時はそのような慣習はなく、出世しなかった力士の断髪式は行われぬのが普通だった。しかし引退にあたり鬘は切らないといけなかったのでOさんは仲の良かった後輩を連れて部屋近くの床屋に行き、そこで後輩に鬘を切り落としてもらった後床屋の主人に髪を整えてもらった。

こうして引退を迎えた後Oさんは地元へ戻り、そこから高校時代の先生の紹介により大阪にある割烹で働いた。しかし高卒で働きに入ってくる者もいる中Oさんは当時25歳を過ぎていた。そのこともあり一緒に働くには気が引けてしまい、1年と経たずにそこで働くことをやめて東京へ戻ることに決め、同じ部屋出身で1つ先輩の元力士に連絡をとった。彼は群馬でちゃんこ屋を営んでいたためOさんも群馬へ行き、住み込みで働くこととなった。

以上がOさんの引退から就職に至る経緯であるが、高校時代のつてや同じ部屋出身の元力士のつてが就職に直結していたことがわかる。しかし本稿で重視したいのは力士間のネットワークが引退後の力士の就職に直結しているということではなく、引退を迎えた力士たちによるOB組織の活動である。

### 出羽海友愛会への加入

出羽海部屋には出羽海友愛会と呼ばれるOB組織がある。もともとは出羽海一門友愛会という名前であったが、「一門」がとれて現在は出羽海友愛会となった<sup>6</sup>。東京都の富岡八幡宮には友愛会の碑が建立されており、毎年その碑の前で神事が行われる。Oさんも引退から1,2年ほどした頃、同じ部屋の1つ上の先輩である元力士Sさんに誘われて友愛会へ加入することとなった。当時の会員に若手が少なかったために積極的に参加するよう働きかける動きが内部でもあり、さらに先輩の会員がSさんに若手を勧誘するよう伝え、Oさんの勧誘に至った。そして現在会長を務めているのがOさんである。引退後も相撲との接点を持つ1つの契機である友愛会への加入であるが、まずは友愛会設立の経緯および碑が建立された富岡八幡宮と相撲の関係を述べたい。

発足までの経緯は元出羽海部屋の力士である小島貞二著の『あるフンドシかつぎ一代記』にまとめられている。以下、時系列に友愛会設立の過程を大まかな時系列でまとめた。

・昭和30年(1955年)12月、五ツ島(もと大関)と綾昇(もと関脇)が一杯飲みながら「みんなどうし

ているか、むかしの連中と会いたい」という話になったのを四海波(もと幕内), 駿河海(もと幕内), 豊錦(もと幕内)たちが聞いて消息のわかる範囲に案内を出した。

・昭和31年(1956年)1月に芝浜松町の料亭で第1回目の会合が行われた。表には『出羽海一門引退力士懇の会』という立看板が掲げられた。料亭の好意であろうが、引退と廃業をごっちゃにしていた。初回の参加者は27名。(安芸ノ海(もと横綱), 九州山(もと小結), 防長山, 高ノ花, 一渡, 陸奥ノ里, 相武山, 宮城海, 因州山(もと幕内), 大場, 小高…)

・九州山の命名で会名が「出羽海一門友愛会」と決まった。

・昭和31年(1956年)5月に第2回目の会合が開かれ、天竜(もと関脇), 大邱山(もと関脇)も参加した。会長に天竜, 副会長に五ツ鳥が選出され、幹事には小島貞二が就いた。関西支部, 九州支部も名乗りを挙げた。

・昭和47年(1972年)秋の幹事会では小島貞二により碑の建立が発案された。先輩の物故が相次ぎ、若い人の加入が少ないのは好ましくないし、角界に1つのこのユニークな会の存続を長くはかるために精神的な拠り所として碑を建てたいという想いからである。

・昭和48年(1973年)10月10日、富岡八幡宮境内の『横綱力士碑』の前に『出羽海一門友愛之碑』が建てられた。宮司富岡興永氏の好意によるもので、費用は会員でまかなった。

天竜会長が碑文を書き上げ、側面と裏側には力士名を四股名で刻む。

以上が小島の記述による出羽海一門友愛会設立の経緯である。また、本の中では興味深いエピソードも紹介されていた。

昭和7年(1932年)に起きた幕内力士大量脱退事件<sup>7</sup>, その責任者が当時関脇の天竜だった。番付の西方を占める出羽海一門が協会に十か条の要求を突き付け、これが受け入れられず脱退し、新興力士団を立ち上げた。一時協会は崩壊の危機に立たされたが、四半世紀を経て昭和33年頃、友愛会の席で天竜と出羽海親方が握手をする場面があり、天竜事件のしこりが消え去ったかのようであった。

友愛会の碑は4面で構成されており、うち2面には四股名で会員と寄進者の名前が刻まれている。力士だけではなく行司, 床山, 呼出しの名前も刻まれている。そしてうち1面には友愛会の碑が建立された経緯が記されている(図7参照)。

かつて出羽海部屋, 春日野部屋を中心とする出羽海一門に所属し、相撲技に励みたるものたち、それぞれの社会より集いて、親睦のため「出羽海一門友愛会」を結びたるは昭和三十一年一月なり。一門の弥栄と相撲道の隆盛を祈り、江戸勸進相撲ゆかりのこの地に友愛の碑を建つるものなり。  
昭和四十八年十月十日建之  
出羽海一門友愛会 会長 天龍三郎書

図7 出羽海一門友愛会碑の碑文

## 富岡八幡宮と相撲

友愛会の碑が建てられた富岡八幡宮であるが、富岡八幡宮と相撲の関係を簡単に説明するにあたり、まずは相撲の歴史を簡単に述べる。鎌倉時代になると全国で勸進と称して猿楽や田楽といった芸能を催して観衆から見物料を徴収するといったことが行われるようになった。室町時代にはこうした勸進興行が盛んになり、芸能の内容も洗練されていった。このころから相撲もそれまでの儀礼や神事としての性格は薄れ、勸進興行と結びつくようになった。その後各地で勸進相撲が開催されるようになったが、江戸時代初期には力自慢の浪人などのアウトローたちが勸進相撲にかかわるようになり、また興行には多くの人が集まったため喧嘩や口論が起こった。そのため江戸幕府は治安対策の一環として勸進相撲を禁止した。勸進相撲は禁止されたものの、村落の祭礼などでは相撲が行われていた。

勸進相撲の禁止を受け、相撲年寄は幕府に興行の許可を何度も願い出て、1684年勸進相撲の興行が許可される。この時に最初の興行地となったのが富岡八幡宮であった。そして1833年以降に回向院が毎年春冬2回の興行場所となるまで富岡八幡宮は興行の中心地となった。(以上、土屋2017: pp.27-30)

このことから富岡八幡宮は勸進相撲発祥の地とされ、敷地内には相撲にまつわる様々な石碑が建立された。1973年に出羽海友愛会碑が建立され、1983年10月5日には境内に横綱力士碑、大関力士碑、巨人力士身長、手形足形碑が建立された。

以上で友愛会設立の経緯及び富岡八幡宮と相撲の関係を述べた。今では富岡八幡宮での神事に参加するのは出羽海部屋のOBのみで、参加人数もだいたい5名前後となっている。また、会の若手が減って行く中、出羽海前師匠である鷲羽山を慕って設立された会と合流することでその難を一時的に逃れた。ここで注目したいのは、実力主義や年功序列の社会とされる相撲界にありながらも、年齢や番付によらずこの会が組織されている点である。碑に刻まれる名前は四股名であるが、現役時代の最高位は記されていない。また、一度協会を脱退した天竜が初代会長となっていたり、第2章で触れた九重騒動によって、出羽海一門の出羽海部屋から高砂一門となる九重部屋に移籍した元力士も総会に参加したりするなど、アウトロー的な者たちもこの会に加わっている。彼らにとっての会に所属するための重要な共通項は、「同じ釜の飯を食った」<sup>8</sup>ことなのである。多々納(1995)は、相撲部屋と若者組は形式的、構造的に類似した集団であるとし、相撲部屋には親方と弟子、関取と新弟子、先輩と後輩など厳しい身分的秩序が見られる反面、極めて情緒的・温情主義的な関係もあり、この関係性こそが日本的関係ともいえると指摘している。引退後の友愛会の活動は、まさに情緒的・温厚主義的な関係が機能しているとも解釈できる。

## 4. 考 察

競技と神事の二元論で語られることの多かった大相撲だが、本稿ではこれらの要素が混在した相撲社会においてOさんを事例に入門まで・現役時代・引退後の歩みを追った。その中でも引退後の

友愛会の活動に着目し、元力士として相撲社会とかかわりを持つ、その在り方に関して考察を行いたい。

引退をするというのは選手としての現役を終了するというだけでなく、神事の担い手でもあった力士から日常の生活に戻るという区切りでもある。しかし、力士の象徴でもある髷を結えるようになるには結える長さになるまで髪を伸ばす必要があり、それは時間がかかることである。その過程で力士としての所作や振る舞いを身に着けて徐々に力士となっていくように、引退を迎えたことで急に力士ではなくなり現代人として生きていくというのはむしろ自然の流れとは言い難いだろう。このように考えると、時間をかけて身体に染み付いた力士としての感覚はどこへ行くのかという疑問が生じる。そこで出羽海友愛会に再び目を向けると、この会が設立された背景には、引退した力士たちがただ単に昔の現役時代を懐かしむというだけでなく、それ以上に、かつて神事の担い手でもあった力士としての自分を再認識する役割も果たしているのではないだろうかと考えられる。その感覚を実感するための装置として、友愛会の碑や毎年行われる神事が挙げられる。そして、それを可能にしているのは現役時代に強固な序列が存在する部屋での生活において、番付が上の者も下の者も、入門時期の早い者も遅い者も、ひとしく「同じ釜の飯を食った」という経験である。引退とは力士であることから力士になる前までの日常への回帰を意味すると同時に、「元力士」として新たな相撲との接し方も生まれるのである。

相撲社会は厳しい稽古を積んでも誰もが番付上位になれるわけではなく、その中の一部だけが出世することができる。このような実力主義は他のスポーツでも同様に見られよう。しかし、相撲は競技であると同時に神事でもある。本稿では報道などで取り上げられることはめったにない、厳しい稽古を積んでもなお番付上位まで上り詰めることができなかつた力士に焦点を当て、引退後までの姿を描き出した。それにより、彼らの担う相撲文化の在り方を提示した。

## 謝辞

本研究は韓国学中央研究院・海外韓国学萌芽型育成事業研究の奨学金支援を受けて遂行することができ、それによって本稿の完成に至った。この場を借りて感謝申し上げたい。そして相撲部屋を訪れた際快く受け入れてくださった出羽海部屋の高崎親方、Oさんをはじめ調査に協力していただいた方々にも心より感謝申し上げたい。高崎親方からは相撲社会に関してたくさん勉強させていただいた。またOさんには出身地である野母崎を一緒に訪問していただき、神事の調査も承諾してくださった。またコロナ禍の中快く電話取材にも応じていただいた。重ねてお礼申し上げたい。

## 【注】

1. かつて女相撲の興行も存在していたが、それに関してはまた別の機会に触れることにしたい。
2. 伊藤重人(2007)は、農村における信仰を背景とした儀礼的なものであったといわれる相撲が都市化とともに消滅するのではなく、大都市に編入された今日でも存続している点を指摘している。
3. 1928年1月よりNHKによるラジオ中継が始まった。

引退後の力士たちが担う相撲文化に関する人類学的研究

4. 日本相撲協会 [http://sumo.or.jp/ResultRikishiData/sumo\\_beya/](http://sumo.or.jp/ResultRikishiData/sumo_beya/) 参照
5. 功績を残した力士に対し一代限りで認められる年寄のこと。
6. いつから名前が変更になったか、正確な年は把握できていないが、1965年に部屋別総当たり制が採用されてから一門意識が薄まっていったことが影響していると考えられる。
7. 春秋園事件とも呼ばれる。出羽海部屋の幕内力士、十両力士が春秋園という料理店に立てこもり、相撲協会へ改革の要求書を提出した。しかし要求は受け入れられなかったため多くの力士が脱退して鬻も切り落とし、その後関西角力協会の設立に至った。しかし東京大相撲の人気にはかなわず、また当時の支那事変などの時世も鑑み昭和12年に解散となった。(高永・原田1990: pp.405-412)
8. この言葉は、元力士たちへの聞き取りの中でも度々耳にする言葉である。同じ釜の飯を食ったという仲間意識が引退後も強く残っていることがうかがえる。

### 【参考文献】

- 伊藤亜人(2007)『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣選書
- 生沼芳弘(1994)『相撲社会の研究』不昧堂出版
- 小島貞二(1991)『あるフンドシかつぎ一代記—戦中・戦後の相撲秘史』ベースボール・マガジン社
- 高永武敏・原田宏(1990)『激動の昭和相撲史』ベースボール・マガジン社
- 多々納秀雄「『同じ釜の飯』考—日本的スポーツの精神風土—」『スポーツコミュニケーション論』(中村敏雄, 1995, 創文企画)
- 土屋喜敬(2017)『物と人間の文化史179・相撲』法政大学出版局
- 和歌森太郎(2003)『相撲今むかし』隅田川文庫
- 『大相撲名門列伝シリーズ1 出羽海部屋|春日野部屋』(2017)ベースボール・マガジン社
- 『大相撲名門列伝シリーズ2 二所ノ関部屋』(2017)ベースボール・マガジン社
- 『大相撲名門列伝シリーズ3 高砂部屋』(2017)ベースボール・マガジン社
- 『大相撲名門列伝シリーズ4 立浪部屋』(2017)ベースボール・マガジン社
- 『大相撲名門列伝シリーズ5 時津風部屋』(2018)ベースボール・マガジン社

### 【参考 URL】

- 日本相撲協会 [http://sumo.or.jp/ResultRikishiData/sumo\\_beya/](http://sumo.or.jp/ResultRikishiData/sumo_beya/) (閲覧日:2020/9/30)
- 相撲レファレンス <http://sumodb.sumogames.de/Default.aspx?l=j> (閲覧日:2020/9/30)

# An Anthropological Study on Sumo Culture by Retired Sumo Wrestlers

Naho KAMINOGO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Lee INJA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

In this paper, we examine the history of a former sumo wrestler who retired without achieving much success in the sumo community where a wrestler is considered to come of age upon receiving the rank of Zyuryo. There has been sufficient work for sumo wrestlers who retired without promotion, but certain sumo stable s have also organized alumnus associations, built monuments at sumo-affiliated shrines, and held rituals Shinto shrines every year. We can observe that the former sumo wrestler was the symbol of the ritual and that retiring does not signify that a wrestler's role is complete. The relationships that the wrestler forms with in the organization is based on the experience of “belonging to the same sumo stable and eating rice in the same pot” more than the seniority system or the merit system. Thus, our study found that this aspect of sumo culture continues to be propagated by sumo wrestlers after retirement.

Keywords : sumo culture, sumo wrestlers after retirement, ment family